

意識のハードプロブレム-物理主義からのアプローチ-

若林 佑治 (Yuji Wakabayashi)

東京大学総合文化研究科

本研究発表では、意識のハードプロブレムに対する物理主義的アプローチの中の1つである、現象的概念戦略 (Phenomenal Concept Strategy) についての考察を行う。意識のハードプロブレムとは、「私たちの意識経験にはなぜ、主観的な側面(クオリア)が伴うのか」という問題である (Chalmers 1996)。意識のハードプロブレムが物理主義にとって厄介な問題であるのは、クオリアが物理的な観点からの説明を受け付けられないように思われるからである。たとえば、赤の経験が脳状態 R によって担われているとする。このとき、脳状態 R によっては、「赤色の経験になぜ緑のクオリアではなく赤のクオリアが伴うのか」を説明できないように思われる。このように、クオリアが物理的な観点からの説明を受け付けられないように思われる現象は、説明ギャップ (Levine 1983) と呼ばれ、現在でも多くの物理主義者を悩ませている。

本研究発表で扱う現象的概念戦略は、説明ギャップの存在を認めながらも、ギャップの存在を物理主義的観点から説明しようという試みである。現象的概念戦略によれば、説明ギャップは現象的概念と呼ばれる概念の特殊性に由来するものである。現象的概念とは、赤の赤っぽさなどの概念 (クオリア概念) のことである。現象的概念は、指示対象である意識経験を直接的に捉える概念であるという意味で、特殊な概念であるとされる (Chalmers 2003, Balog 2012 など)。たとえば、赤の経験をしているとき、赤のクオリア概念を用いることで、「赤を見るとはどのようなことか」という観点からその経験を直接的に捉えることができる。現象的概念がこのような特殊性を持つことにより、現象的概念と同じ経験を指示する脳状態 R などの非現象的概念との間には非対称性が存在することになる。現象的概念戦略によれば、以上の非対称性の存在によって、現象的概念と非現象的概念の間にはいかなる導出関係も成り立たず、ゆえに、説明ギャップが生じることになる。

現象的概念戦略が成功するためには、現象的概念が持つとされる以上の特殊性が物理的な観点から説明可能でなければならない。これまでに現象的概念戦略の支持者から提出されている有力な説明の1つは、現象的概念が部分的に指示対象である意識経験そのものによって構成されるという説明である (Papineau 2002, Balog 2012 など)。一方で、そのような説明によっては、問題となっている現象的概念の特殊性を十分に説明することはできないということが指摘されてもいる (Levine 2007)。そこで、本研究発表では、現象的概念と意識経験との部分的構成関係に焦点を当て、レヴァインの主張を踏まえた上で、部分的構成関係によって現象的概念の特殊性が十分に説明可能であるのかどうか、また、説明可能でないとしたらそれはなぜなのかという点について考察する。